「ロシアの巡礼物語」

小田島　太郎

十数年も前のことだが、ロシアの巡礼物語をドイツである知人が私にくれた。読み出すと心を捉えられ、あっという間に読み通した。帰国後、横浜チャペルの奨励でこの本に触れ、「誰か邦訳を出してくれると良いのだが…」と話したところ、ハリスト正教会の信徒であるＳ君が、邦訳が既にあるのではないか、と私に教えてくれた。その通りであった。すぐ買って読んだ。これは英語訳からの重訳ではあるが、やはり日本語のほうがわかりやすい。ローテル・斉田共訳、『無名の順礼者　あるロシア人順礼者の手記』、エンデルレ書店、１９９５年、であった。私は、順礼がロシアの大地をあちこち経巡るので「巡礼」の字を使うが、この翻訳は「順礼」を用いる。

さて、春学期にこの本をまた読んた。といっても今回読んだのは、１９９８年の第２刷で、増補版である。これは、私が買った同じ本の３冊目だ。最初に買ったのは、戻ってこなかった。私の「ロシア宗教史」を聞いてくれたある学生が、就職活動のため授業への出席もままならず（という自己申告で）、期末試験のほかにレポート提出となった。そのときに貸したのが、最初の１冊である。彼は食品関連の会社に就職できた。その後結婚して、ある日、新妻が彼のもつ数少ない書籍のなかにこの本を見つけ、何か夫とそぐわないと奇異の感に打たれたことや、筋肉マンみたいに屈強な彼がその後、本の影響を受けて妻を捨て、順礼になっている、などと想像を楽しむこともある。勿論この本がそこまでの効果をあげないように願うが、あの本がどうなっているか、彼は今頃どうしているだろう、と考えないわけではない。

私が買った２冊目はどこへ行ったか。これも学生の手に渡った。当時は１００人を越えるような「ロシア宗教史」の授業で、勿論この本を取り上げたが、今どきの学生は、ちょっとやそっと薦めたくらいでは本を読まない。そこで「この本を読んで、５章までの内容を要約すれば、努力点を出すし、記念にこの本も贈呈する」と約束した。私の魂胆は、要約を教材プリントに刷り込み、授業で配布することだった。自分でする労を省く算段である。このＴ君が、なぜこの課題を引き受けたのか、ついぞ聞かなかったが、読んでみて、どうやら何の感興も覚えなかったようだ。彼の要約から、そう感じられる。勿論、そのような要約は授業で一度使ったきり、止めてしまった。その後Ｔ君はこの本を抱え、どうしているだろうか。あの本を捨ててしまったかもしれない。それから時が流れて数年後、私は今手元にある３冊目を買った。絶版になっては困ると気づいたからだ。これを今回読み直した。読むと生き返るような思いがする。

これも私の知人だが、熟年の謹厳実直なドイツ婦人が、ドイツ語版を読んで、この巡礼者の「寄生虫のような生き方」をいたく批判した。彼女は熱心なプロテスタント信者である。一方アメリカのＪ．Ｄ．サリンジャーに「フラニーとゾーイー」があるが、このユダヤ人作家もこの小品のなかで、わざわざこの物語を取り上げ、わが巡礼者に厳しい批判を投げつけている。だが私は、この二つの事例の一致に、ほくそ笑んだ。プロテスタント・キリスト教とユダヤ思想はどこか陰でしっかりと手を繋いでいる、という私のテーゼがここでも証明されたからだ（これぞ正真正銘の「洞窟のイドラ」か）。皆さんはこの本を読んでみたいと思われませんか。

（おだしま　たろう　所員・文学部教授）